

以下のスクリプトを Podcast 番組として読み上げてください。テンポがよい掛け合いトークとなるようお願いいたします。

ケン:みなさん、こんにちは！SBI フェリー ポッドキャストへようこそ。記念すべき第1回のお相手は、私、ケンと、

ミカ:ミカです。よろしくお願いします！

ケン:この番組は、SBI 金融経済研究所、通称 SBI フェリーのレポートや研究テーマをもとに、現代の金融やテクノロジーを、生活者目線で分かりやすく掘り下げていくトーク番組です。

ミカ:はい！第1回のテーマは、「渡来銭と暗号通貨」。いきなりディープで、歴史ロマン溢れるテーマですね！

ケン:そう！もとなっているのは、SBI 金融経済研究所の新任研究主幹、そえじまゆたかさんのレポート。

ミカ:マニアックでありながらも、めっちゃ今っぽいですよね。というのも、テーマが古代・中世の日本のお金からスタートして、そこからどう暗号通貨につながるのかっていう壮大なお話なんです。

ケン:で、今回はそのレポートをもとに、「お金ってそもそも何なのか？」っていう、シンプルだけど深〜い問いを一緒に考えていきたいと思います！

ミカ:それでは、早速トークスタート！

ケン:まず最初に、そえじまさんが「貨幣は社会の最重要インフラのひとつ」って言ってるんだけど、これってどういう意味だろう？

ミカ:うん、貨幣って単にお金じゃなくて、社会の中で「信用」や「やりとりの仕組み」を成立させる基盤ってことなの。たとえば、オンラインで何かを買うとき、「この支払い大丈夫かなあ？ちゃんと送れるのかな」って心配なくて済むのは、お金がきちんと機能してるから。

ケン:確かに、払ったら届く、うけとったお金がどこでも使えるお金だっていう感覚って、ものすごく当たり前に思えるけど、それを成立させてる仕組みって、実は深かったりして。

ミカ:まさに！で、そえじまさんのレポートでは、その「仕組み」がどう作られてきたのか、古代から中世、そして今現在、暗号通貨に至るまでを追ってるんですよ。

ケン:じゃ、その始まり「古代」なんだけど、日本で最初に政府が出したとされる和同開珎っていうお金、これどういう位置づけだったの？

ミカ:簡単に言えば、税金とか労働の対価を払うための「国家のお金」。面白いのが、貨幣そのものの金属としての価値よりも、「政府がこれで支払うよ、受け取るよ」って公言したことが価値を生んでいたの。

ケン:なるほど！で、つまりそれって、現代の「1万円札」の紙自体には、そんな価値がないのとちょっと似てるよね？

ミカ:その通り。信用に裏打ちされた存在ってこと。

ミカ:で、次に来るのが中世。この時代のお金の進化がまたワクワクでして…

ケン:まさかの「お寺や神社や貴族たち」が、自分たちでお金、じゃないけど「支払いにつかえる紙の証書」を発行してたんでしょ？

ミカ:うん！いわゆる「信用貨幣」って呼ばれる構造で、例えば「この証書を渡せば、その人からお金がもらえるよ」みたいな。為替手形の原型みたいなもので、紙がメインだったのも特徴。そしてこの時代に登場してくるのが…

ケン:キター！今回のキーワードの一つ、「渡来銭」！！

ミカ:はい。渡来銭っていうのは、中国、つまり外国から輸入された貨幣のこと。驚くのは、自国の国家が発行したものじゃないのに、日本国内ですごく広く流通したってところ。しかも数百年の長さで。

ケン:しかも、それって、貴金属じゃなかった。つまり、金属としての価値もなかったんでしょ。あと、発行した中国の王朝が滅んでしまっても、関係なく使えたそう。発行した国家の信用が無関係ってことだよね。

ミカ:そう！みんながなんとなく「これなら安心」と思って受け取ってた。もちろん、経済活動の規模に対して圧倒的に貨幣が足りなかったって事情もあるんだけど、ポイントはそこだけじゃない。そもそも、中国のお金だという意識すら、なかったんだと思う。

ケン:何がそんなに「安心感」を生んだの？

ミカ:ひとつには、渡来銭が「年貢や寄進の支払いに使える」ってことが明示されたことで、一般の人々も「じゃあこれ、安心して持てる」と思ったのね。それで、次第に、年貢は関係ない人どうしの取引にも広がった。

ケン:なるほど、「ちゃんと使える場所がある」って、まるでキャッシュレス時代の電子マネーと同じだね。加盟店が少ないと不安だけど、コンビニで使えるってなった瞬間に普及する、みたいな。

ミカ:的確な例え！ だから、制度的な信用だけでなく、「日常で使える」って経験の積み重ねが、お金としての受容性を高めていったところが面白いの。

ケン:そこから暗号通貨の話に戻ってくるんだけど…そえじまさんは、渡来銭とビットコインとかを「構造的に似てる」って言ってるよね？

ミカ:うん。どちらも、国家が裏付けしてないし、素材そのものに価値がないし、コストさえ払えば誰でも輸入、発掘できるっていう性質がある。

ケン:つまり、マイニングに電気代と計算力を使えばビットコインが手に入る。これと、中国からの輸入コストや模造銭の作成コストを払えば貨幣をミントできる…みたいな？

ミカ:その感覚に近い。ただし、大きく違うのは「一般受容性」。

ケン:うん、それは確かに。どれだけブロックチェーンがすごくても、日常のスーパーで「今日はビットコインをお願いします！！」って言えないもんね（笑）

ミカ:そこなんです。買い物に使える、銀行に預金できる、1円は1円であるっていう安心感が貨幣にはある。これと比べて、暗号通貨は、価値を保証するものが暗号資産の未来の価格だから、どうしても価値の変動が大きい。

ケン:でも、それって逆に、「投資対象」になるから、おもしろがられてるところもあるよね。

ミカ:うん。ということは、暗号通貨が本当に「お金」として機能するには、財やサービスに対する価値の安定性とか、受容範囲をどれだけ広げられるかがポイントになるってことだね。千円で何が買えるのかってイメージはみんなもってるけど、0.1 ビットコインで何が買えるのかって聞かれても、すぐにはわからない。わかったとしても1年後もその価値が保たれているって安心はないものね。

ケン:じゃあ未来に向けて、貨幣ってどうなっていくと思う？

ミカ:そえじまさんは、そのヒントこそ「貨幣の三大機能」にあるって言ってるよ。つまり、「価値の保蔵」「価値の尺度」「交換の手段」。この3つがうまくバランス取れてるかが焦点。

ケン:ニワトリが先か。卵が先かじゃないけど、どれかだけあっても、他が伴わないと「マネーらしさ」って出てこないんだね。

ミカ:そう。たとえば、いくら「価値の保蔵」ができて、それを日常生活で使えなければ「交換手段」にはならないし…って話。価値尺度として機能してこそ、価値保蔵手段や交換手段になる。そして、価値保蔵ができるから、今日使うことと来年使うことのバランスがとれて、未来にわたっての価値尺度になるってこと。ニワトリたまごって例えば、ぴったりあってると思う。

ケン:あと現代的にいうと、中央銀行が発行する預金通貨と、民間銀行が発行する預金通貨の二層構造とか、ステーブルコインやCBDCみたいな動きもレポートに出てきてるわけで。

ミカ:うん。そういった新しい貨幣システムの模索の中で、デジタルとリアル、中央集権と分散型、そのバランスが問われてる時代と言えるかも。

ケン:ということで…初回だったけど、話が深かったね。こんなふうに一見遠い過去の「渡来銭」が、暗号資産にも通じる話だとは！

ミカ:ほんと、貨幣の歴史は「人の信用の歴史」でもあるんだなって感じました。リスナーのみなさんにも、「お金って何？」って少し考えるきっかけになったら嬉しいです。

ケン:はい、それでは次回も、日常と未来がつながるテーマをお届けしていきます。SBI フェリー ポッドキャスト、この番組がみなさんの思考のスパークになることを願って！

ミカ:今回はありがとうございました！またお会いしましょう～！